

袖すり合うも他生の縁  
平壤から熊本へ

畑から帰って車の積荷を降ろしているところへ近所のS子さんが買物帰りを通りがかった。畑仲間から戴いた極太の大根が数本並んでいるのを見て、「あら、美味しそうな大根ねえ」「食べたい?」「食べたい!」「じゃ、一本どうぞ。重いから車で送ろうか?」「大丈夫よ!」S子さんとは、町内会の役員を一緒に務めたこともあり、近所ですれ違う度に立ち話をする間柄だ。名前から想像すると紀元2600年(昭和15年)の生まれと思われるので尋ねてみたことがある。あたってはいた。しかもS子さんの娘さんが当家の長女と同学年で、昔はかみさんとはPTA仲間だった。ご主人を亡くされて、長く一人暮らしをしているが、絵を描く楽しみを持っていて日々の暮らしで退屈することはなさそうな人だ。問わず語りに話が始まった。

「私、一週間ほど旅行に行って来たの」「ほー、それはよかったですね。どこへ?」「熊本へ行って来たんです。同窓会があって」「えっ? 熊本出身だったんですか、知らなかった」「出身と言えば、私、大陸なんですよ」「へー、それは知らなかった。満洲ですか?」「私は朝鮮です、と言うよりも北朝鮮です」「そうですか、ご両親が軍隊関係だったとか?」父親は朝鮮総督府の職員だった。着任時の勤務地は京城(ソウル)だったが、最後は平壤(ピョンヤン)だった。

日露戦争の5年後、1910年(明治43年)に我が国は日韓併合条約を締結し、朝鮮半島を正式に手に入れる。日露戦争終結時に韓国統監府が設置され、初代統監は伊藤博文だった。これを改組した形で朝鮮総督府が創られ、初代総督には寺内正毅が就いた。1945年(昭和20年)の終戦までこの組織は存続したが、本土から送り込まれた職員は1942年(昭和17年)には2,000人を超えていた。

父親は、業務上の立場からかなり早い時期に敗戦の予感をしていたので、密かに帰国準備をしていたらしい。幼い子どもを連れて日本に帰ってきた夫婦は、父親の故郷である熊本に辿り着いた。実家のある町まで辿り着いたが、その場所には元の家はなく、何故か学校が建っていた。やむを得ず、親子はさらに奥地の山鹿まで約30Kmを歩き、安住の地を得た。

途中でソヴィエト兵に出会った恐怖や、様々な難儀をしたことなども織り交ぜて、平壤から日本までの道のりを語ってくれた。こうして大変な思いをして朝鮮から日本まで帰ってこられたけれど、途中で餓死したり病死したりした人も沢山いたし、様々な理由により帰り道で命を落としたり離別した人もいた。また、現地の人と結婚してその地に留まった人もいたし、それでも離別して帰国した人もいたり、自分よりも大変な思いをした人は数知れないと言う。

4年ほど福岡に住んで九州一円で仕事をしたことがある私は、山鹿市を流れる菊池川の清流を知っていたので、話はさらに弾んだ。

S子さんはこの町で育ち、高校を卒業した。80才を過ぎても何人かの友人との交友が繋がっていたことで、再会の話が持ち上がり、それが同窓会に発展して、山鹿の温泉宿で実現した。

そして、地元の人が熊本の各地を案内してくれたり、楽しい旅行になったと言う。

子どもの頃に熊本市内から見た熊本城の大きさと、今感じる大きさが違うことをはじめとして、様々な景色の変化を話してくれた。天守閣までの距離があんなに長かったとは・・・とか、

阿蘇の山の形、噴火口の位置と形状が、自分の記憶に残っているものとは随分違っており、何度か繰り返した噴火や地震・台風の影響の大きさを感じたとも。

すれ違う人と挨拶をすることを心がけて実践して20年ほどになる。すれ違いの挨拶は形式的なものでも、同じ人と何度もすれ違うと、時候の挨拶やその日の気分を付け加えられるようになる。そして、相手が応じてくると双方向の交信に発展して、長い時間の雑談になったりする。

こうしたことを繰り返している内に、「この人、こんな人だったんだ」とか、「この人、こんなことを知っている人なんだ」など、自分として意義を感じるが増えてくる。

一度だけの会話の人もあるが、中には度々の交流に発展する人もいる。時には、「人には歴史あり」、その人の人生の歩みをお聞きすることになることもある。

長い雑談は小雨の降り始めて終わった。

「いい旅行ができましたねえ」「楽しい旅行だったわ」

うれしいことや楽しいことは、誰かに話すことで楽しさが倍増すると言われているが、まさにそのとおり。

うれしかった出来事を、きれいさっぱり語り終えたS子さんは清々しい表情で家路についた。

買物袋を片手に、太い大根をもうひとつの手で大事に抱きかかえて帰る後ろ姿が、楽しそうだった。

以上